



右の中で第一と第三とは新彗星らしい。第二のものは百年以前から御馴染の星であるが最近、木星の攝動を受けて、少しく軌道が大きくなつた。  
尚今一つ、エンケ彗星は七月二十七日に南亞喜望峯でライド、スキエレルブ両氏が発見したといふ。

●外國に於けるウイネケ流星群の觀測 最近に手に入つた報知によれば、去る六月二十五日頃から米國のペアナド氏や印度のチャンドラ氏等は此の流星群を見守つた。何れも數個の星を見たばかり。ペアナド氏はデニング氏の一九一六年に見たのが唯一の例だつたのだからと言つてゐる。しかし一方に於て、デニング氏はやはり六月二十八日の夜に此の群の流星を若干個觀測し、殊に一等星以上のものを四つも報告してゐる。

●八月の流星毎年八月は流星の多い月であるが、今年も其の例に漏れなかつた。東京の神田氏は八月十一日わざ／＼長野縣の北部に旅行して、同好會員中澤、宮川諸氏等と數百個の流星がベルセウス座から飛ぶのを觀測せられた。京都では中村氏等がやはり此好機を逸せず毎夜大勉強で觀測せられた。其の收穫は多大であるらしい。目下其の結果を整理中又、山本助教は荒木學生と共に、丁度八月十一二日頃の夜は淺間山の山腹に重力偏差觀測中であつたが、山上の空が非常によく澄んだ空で、多くの大小流星を觀られた。特に十一日の午后十時頃には金星の光に數倍するや

うな大流星が飛んだので、長野縣では其の輝いた尾を見た人は彗星だと言つて大騒ぎであつたらしい。此の流星は別項記載の如く、京都で山本夫人も觀測された。

●相對原律の難點 アインシュタイン教授の相對原律が近頃の天文物理學界に於ける大評判であるが、純天文學上から此の說の正否を檢するものが三種類の現象がアインシュタイン氏自身によつて示されてゐる。即ち

- (一) 日蝕皆既の時太陽に近い星の移動
- (二) 水星軌道の近日點の異常進行
- (三) 太陽から來る光波の變移

右の中(一)については一昨々年英國から派遣された觀測隊が南太平洋の日蝕で略此の事實を認めた。又(二)は十九世紀の中頃ペリエーの發見以來の難問題が之れによつて解決された。又(三)は、次に(三)についても近頃獨佛あたりから實驗的証明を發表した學者がある。それで、之れでアインシュタイン說は天文學上から完全に承認を得たかといふと、決してそうではない。近頃、米國のプーア氏(C. L. Poor)はサイエンス誌上に於いて、(一)の問題を論じてゐる。プーア氏に據れば、若しアインシュタイン說で水星の近日點の異常進行が認められるとすると、同様に金星や地球や火星にも近日點の異常進行がある筈なのに、事實此の事が無いといふのである。氏は水星に限つて此の異常進行が存在するのを、ゼーリゲル流に考へて、太陽系の中心部に擴がつてゐる。一種の抵抗物質によつて説明するの

が好いと云つてゐる。其の他(二)や(三)にて種々の異論がある。がアインシュタイン說に關する精しいことは近日、項を改め紹介する。

●ナハリヒタン雜誌創刊百年 獨逸キールから發行してゐるアストロノミシエナハリヒタン(略して「ア・ズ」)雜誌は今を去る

百年、西曆一八二一年、九月に其の第一號を發刊した。創刊者はアルトナ天文臺のシウマール(H. C. Schumacher)で、デマンルクの大藏大臣モエスチンク(Moesching)と相談の結果、天學上の小論文、觀測結果及び推算豫報等を各地の同勞者間に迅速に頒たんだめの目的を持つて發行されたもので、始めの間は特にベツセル、ガウス、オルベルス等の援助によつてゐた。平常は大判八頁を以つて一號分とし、材料のあり次第發行する(こゝに、二十四號を以て一卷に纏められてゐる内容は始めから寄稿者の意を尊んで獨、佛、英、羅典の四種の言語なれば原文のまゝ載せる規定であつたが今日までの經過から見ると、尙右の外に伊太利、葡葛牙、西班牙の三國語も載せた。又必要に應じ挿圖として、木版、銅版等をさまざま用ゐてゐる。今日までの編輯主任者は、

シウマール(一八二二—一八五〇)

A. C. ベテルセン(一八五一—一八五四)

P. A. ハンセン(一八五四年二月—十月)

C. A. F. ベテルス(一八五四—一八八〇)

C. F. W. ベテルス(一八八〇—一八八二)

A. グリユゲル(一八八二—一八九六)

